

異世界マンガ作画大賞 課題作品 1（男子向け）

◆概要

魔術大学の講師・トールは、専門の支援魔術を見下され、ついには大学をクビになる。トール自身も自分の魔術を過小評価していたが、実際にはその支援魔術は世界最強であり、その魔術を学んだ教え子たちも数々の偉業を成し遂げていた。最強の支援魔術で無自覚に活躍していく、おっさんの成り上がりストーリー。

◆キャラクター設定（以下4名のキャラクターデザインを作成して下さい）

○トール

男性、43歳、身長175cm

職業：魔術大学に勤める講師。

専門の支援魔術の腕は超一流だが、支援魔術が軽んじられているため助教授にも出世できず、他の先生の雑用や庶務という立場に収まっている。

特徴：冴えないおっさん。年齢の割に髪はフサフサ（茶色）。

特段モテるわけではないが、筋肉質で見た目は悪くない。

○レイナ

女性、19歳、身長165cm

職業：魔術大学2年生。2年生ながら全ての単位を取り終えている天才。

その正体は皇女に仕える宮廷魔術師。

特徴：すらっとした長い手足の美人。ロングの髪の毛（亜麻色）。

マントの下には黒のブレザーとスカート。

○ギベルド

男性、19歳、身長182cm

職業：魔術大学2年生。大学に多額の援助をしている伯爵家の子息。

父は宮廷魔術師の副師団長で、自身も宮廷魔術師を目指す。

特徴：父親譲りの体格と魔術の才能を持つ。

才能以上に自信家で、親の七光りらしい印象の青年。

○ミア

女性、21歳、身長155cm

職業：新米近衛騎士団員。戦力評価でEランクと評され、早くもリストラの危機。

特徴：ショートヘア（茶色）、華奢な体躯ながら巨大な盾とメイスを装備する。

◆課題小説

(以下から一部シーンを抜粋して、マンガ 4-8P 分の完成原稿を仕上げてください)

※トールとミアがチームを組んで、ギベルドとヴェルガー（騎士団員の男性）のチームと実戦形式で試合をするシーンです。

※ヴェルガーのキャラクター詳細は下記です。

男性、20 歳、身長 185cm

職業：近衛騎士団団員。

冷静沈着で生真面目。

特徴：大柄でがっしりとした体格。

全身を覆う重厚な鎧と両手持ちの大剣を装備する。

まず初めに動いたのはギベルドだった。

「あの女（※編集部注/レイナ）がいなきゃお前なんて怖くねえ！！ 【ヘルバーン】！！」

両手を天高く掲げるギベルド。【ヘルバーン】は高威力で知られる上級の炎魔術だ。

トールはギベルドへと手を向ける。

「させるか—— 【遅延】、【魔撥パージ】！」

トールは動作を遅くする【遅延】と、魔力吸収を阻害する【魔撥】をギベルドにかけ沈黙させた。

「あ、あれ！？ な、なんで！？」

魔術を撃てないギベルドは慌てふためく。

その隣を、ヴェルガーが鞘入りの両手剣を持ちながら通り過ぎる。

「やはり、只者ではないな……ここは」

ヴェルガーは鞘に納めたまま両手剣を構え、ミアに体を向ける。

「悪く思うな、ミア！！」

ヴェルガーは一気に地面を踏み込むと、ミアへと走った。

ミアもまた大盾を前に構え、迎え撃とうとする。

トールといえば、ミアとヴェルガーのどちらに手を向けるか悩んでいた。

(ヴェルガーの鎧はおそらく魔術耐性が付与されたミスリル製の鎧。ヴェルガーを弱体化させるよりも)

トールはミアに、以前と同じく動きを速くする【加速】と、その大盾に装備を頑丈にする【鉄壁】をかけた。

「ミア、支援魔術をかけた！」

「ありがとうございます——ひっ！？」

ヴェルガーはミアに瞬く間に迫ると、両手剣を一挙に振り上げる。

ミアは大盾を少し引き——振り落とされる両手剣を弾いた。

ゴンという鈍い音が響くと、それを皮切りにカンカンと金属の触れ合う音が木霊する。両手剣を目にも留まらぬ速さで振るうヴェルガーと、それを大楯でひたすら防ぐミアの攻防が続いた。

一方のトールはギベルドを最低限の魔力で抑えつつ、残りの魔力でミアを支援する。

(このままじゃミアの盾が持たない……他の手を打つ必要がある)

トールはギベルドにかけた【遅延】と【魔撥】を解く。そしてすかさず——

「お！ 動けるようになった！ よっしゃ——ひっ！」

喜んだのも束の間、ギベルドはトールの放った電撃に怯える。

ヴェルガーもそれに気が付いていたが、横目で見送った。

(バカ息子と知られているとはいえ、ギベルドも貴重な戦力。だが、助ける余裕はない)

ギベルドの体に微弱な電流が走る。

「いっ！！」

体を震わせその場に崩れ落ちるギベルド。トールの放った雷魔術により、体を動かさなくなってしまう

「ぎ、ギベルド！！ ちゅ、中止だ！！ 試験は中止だ！」

そう叫ぶベーダン（※編集部注/試合の監督者。ギベルドの父親であり、ギベルドに肩入れしている。）だが、誰も振り返らない。

周囲の者たちはギベルドなどには目もくれず、ヴェルガーとミアの打ち合いに釘付けだった。

「す、すごいな」

「魔術の試験を受けたつもりが、ヴェルガー殿の剣技が見られるなんて」

「あのミアって子も、新人とは思えん盾の扱い方だ」

聴衆の声を聞いて面白くないのはベーダンだ。

すぐに声を上げようとする。

「ち、ちゅう……あ、あえ？」

喋れないベーダン。体を動かそうにも動けない。

レイナはベーダンに体を重くする【不動】と、音を消す【沈黙サイレント】をかけていた。特に口周りには念入りに。

ベーダンに顔を向けず、レイナは呆れるような顔で呟く。

「やはり皆、先生には目もくれずですか……まあそこは、いずれどうにかするとして。ここからはヴェルガーとの戦いに集中できますね、先生」

トールはヴェルガーへと手を向ける。

(ここから攻撃魔術を放てばミアに当たる可能性もある……まずはヴェルガーを少しでも弱体化できないか?)

【遅延】をヴェルガーへと放つトール。

しかしヴェルガーは鞆から両手剣を抜くと、迫る【遅延】の光を斬り捨てた。その後もトールの魔術を巧みに斬り捨てていく。

奴には通用しない——トールはヴェルガーの弱体化を諦めた。

(魔術を斬るか。あのヴェルガーという男、相当な強者だ)

ヴェルガーの両手剣と鎧には魔力を集める性質を持つミスリルが使われている。特にその両手剣には魔術を斬れる支援魔術が付与されていた。

(ミアを負けさせていいなら、他に手はある。だが、ミアを近衛騎士団から辞めさせるわけにはいかない)

全力でミアを支援して攻撃の機会を作る——トールはミアへと【加速】をかける。

「ミア！ メイスを上から振り下ろしてくれ！」

トールの言葉を聞いたミアは腑に落ちないといった顔をするが、すぐに小さく頷いた。

ミアは言葉通りメイスを振り上げると、ヴェルガーは両手剣で防ごうと構える。

(今だ——)

トールは振り下ろされたミアのメイスに、【不動】をかけた。今まさに、ヴェルガーの両手剣に触れるというところで。

金属と金属が触れ合う音が鳴り響く。

重いメイスの一撃を受けたヴェルガーの両手剣は、大きくしなるように揺れていた。

「——くっ！ そう来るか！！」

初めて焦るような顔を見せるヴェルガー。しかしミアの盾へと突進すると、そのままミアの盾を掴みトールへと肉薄する。やがて接近したところで盾ごとミアを地面へ投げ飛ばし——両手剣を振り上げた。

「ヴェルガーの負けね。もう、あの剣は」

レイナがそう呟く中、両手剣を振り下ろそうとするヴェルガー。

「うおおおお！ ——っ！」

しかし、ヴェルガーの両手剣はボロボロと崩れてしまった。

「私の負けか……」

柄だけとなった両手剣に視線を落としヴェルガーは呟いた。

ヴェルガーは尻餅をついたミアに言う。

「ご苦労だった……明日よりも更に鍛錬に励め。我々は騎士団の本部へ戻るぞ」

「は、はい！」

ミアは立ち上がるとトールに深くお辞儀をして、スタスタと立ち去るヴェルガーを追った。